

## 故山本健吉会長追悼特集

### 会長山本健吉さんのこと

宮 英司

いろいろお世話になった先輩が急に旅立ってしまった。

いま思えば、昭和小学校、城東中学校、高知追手前高校と知らないうちに2年先輩の後を追いかけていたような自分だった。出会ったのは働き始めてからだ。小学校と中学校。畑は違ったけれど放送・視聴覚教育に全力投球をする中でいつの間にか知り合いとなっていた。昭和61年度に高知県で開催した全国放送教育研究会高知大会の際には大車輪の活躍だった。

教育委員会時代にはコンピュータの導入で一緒に残業する時間が延々と続いた。多くのパソコン・メーカーのカタログを隅から隅まで読み通した力は山本さん独特の眼力であったような気がしてならない。中学校へは333台、小学校へは777台と嘘のような「ゾロメ」の台数を実現した時には達成感というよりは、共通して奇妙な脱力感を味わっていた。

退職後も予期せぬうちに幼稚園勤務で同じ道を選択していた。また、同じ頃に寺田寅彦記念館友の会の活動へと…。恒石直和先生の「土佐いろはがるた」に理科と社会科の会を代表して、推薦文を執筆したのも何かのご縁だったかもしれない。

オーテピアの寺田寅彦像の建立にはいろいろな思いがよぎる。朝日新聞の記事をきっかけとした銅像づくり。寺田博士の偉大さを知らしめるにはこれしかない…との信念で突っ走った。日曜市に集う人々が観光客も含めて、改めて寺田博士について理解を深めるきっかけになってほしいと願ったことである。

山本さんは、何事にも素早い対応を信条にしていた。早すぎて間違える時もあったが憎めないブルドーザーのような人だった。どちらかと言えば英語が苦手だったかもしれない。だけど「英語が苦手だったからこそ、山本さんが高知に、日本に残ってくださった。」と慰めたり、冷やかしたりもした。英語が得意だったら、きっと海外を飛び回っていたに違いない。

あれから4か月。残されたファイルをめぐりながら、市役所や税務署の対応に追われている。こんなに多くの雑務をこなしながら、春と秋の研修会等を企画・立案していたとは…。そのエネルギーに改めて驚きつつ、本会の活動を継続・発展させていきたいと願う毎日である。

あちらでは、少しはゆっくりとしてほしいと心から願っている。お疲れさまでした。

\*

最後になりましたが、令和3年9月3日に急逝された前会長・山本健吉さんの追悼特集に、ご多忙の折にも関わりませず多くの方々が貴重な文章をお寄せくださいました。誠に

ありがとうございました。残された役員一同、これまでの積み上げに学びつつ、改めて寺田寅彦先生の研究と顕彰に努めていきたいと考えたことでした。今後におきましても、寺田寅彦記念館友の会をよろしく願いたいましてご挨拶に代えさせていただきます。

(本会会長代行)

## 山本健吉氏を偲ぶ

山田 功

山本健吉会長の訃報に接するどれくらい前であったろうか、そんなに前ではなかったと思う。会長からメールが届いた。『榊』の編集は今後、四宮氏に頼んだと。それから、私が都合で会長職ができなくなったらどうしたらよいかとの相談もあった。なんだか気になってなぜそんなことを聞かれるのかと問い返した。今思うとそれはすべていざという時、周辺に迷惑をかけないようにとの気配りであったという気がする。こんなところまできちんとされる人であった。誠に残念至極である。

寺田寅彦記念館友の会が危機存亡の時、内々に T 氏から新しい会長に山本健吉氏を推したいと話があった。元義務教育の校長であり、誠実な人で、実行力があり適任であると。私が常日頃信頼をしている T 氏のこと、即座に賛同をした。期待にたがわず、新しい友の会づくりに精力的に活動された。毎年の友の会総会では、講演会の垂れ幕を墨書し、投影機や録音機、資料も皆会長が準備され、司会進行をされた。そして、講演の記録をまとめられた。とにかくよく働かれた。

小学生に科学の面白さを伝えようと、手作りの実験道具をいくつも工夫された。それを見せてくださるときは、とても楽しそうであった。私の提案も快く取り入れてくださり、そうして、実験キットがいくつかが出来上がった。指導者がこれだけ楽しければ、学ぶ方も楽しいに違いない。

私が『教科書に掲載された寺田寅彦作品を読む』を自費出版するとき、いくつかの出版社と一緒に巡ってくださった。どの出版社が良いかはお聞きしても一言も言われず、私の判断に任せられた。そして、巻頭言は喜んで引き受けてくださった。出来上がった本の紹介も積極的にやってくくださった。本当に面倒見の良い方であった。お陰様でその本の中のひとつの章「藤の実」は、窮理舎の伊崎修通様が優れた共著者を加え一冊の本にしてくださった。それが最近出版された『寺田寅彦「藤の実」を読む』\*である。見ていただけないのが誠に残念である。

この世をあまりにも早く駆け抜けてしまわれた。もっともっとゆっくりでいい、全国の寅彦ファンのために活躍していただきたかった。

(本会副会長)

\*『寺田寅彦「藤の実」を読む』は 26 ページを参照ください。(編集部)

## 山本健吉さんを偲ぶ

青木 章泰

私が高知商工会議所の会頭を務めていた平成 26 年、山本健吉さんから「寺田寅彦の銅像を建てる会」の会長就任を依頼されました。そのご説明には並々ならぬ熱意を感じましたし、私自身も阪神淡路大震災の経験者であり、商工会議所としても企業の南海トラフ地震対策に力を入れておりましたので、お引き受けしました。

当初、募金は思うように集まらず、決して順調な船出とは言えませんでした。山本さんはその実直な性格で会員をよくまとめられ、個人への募金も積極的に推進していただきました。企業が寄付しやすいよう配慮した税制控除の申請、市役所との交渉、銅像の設置場所選定など、山本さんは綿密にスケジュールを立てては一つひとつ精力的に即実行のスタンスで取り組まれ、その姿は大変頼もしく感じました。

銅像設置場所について、オーテピアのどの場所に銅像を建てれば多くの人の目に触れるか、母校である追手前高校との位置関係はどうすれば良いかなど、熱心に検討したことが思い出されます。銅像の台座正面には「天災は忘れられたる頃来る」ではなく、「ねえ君、不思議だと思いませんか」にしたいと考えておられると聞きました。山本さんには、地元が輩出した偉人の顕彰に留まらず、未来を背負って立つ子供たちに向けた思いがありました。

4 年間に渡るご尽力によって目標額の 1,000 万円を超える募金が集まり、彫刻家の大野良一先生に制作いただいて立派な像を建立することができました。そして、平成 30 年 7 月 24 日、オーテピアオープンの日、無事に除幕式を迎えられましたが、ご苦労された山本さんが誰よりも感慨深そうにされていた姿が印象に残っています。本当にお世話になりました。

急逝の報を受けたときは、大変残念でなりませんでした。

生真面目で相手思いの山本さん、そのご遺志は必ず、高知の子供たちに伝わると私は信じております。

(高知商工会議所最高顧問)



除幕式で挨拶する青木章泰会頭（左）、銅像右でうつつむいているのが山本会長（筆者提供）

## 山本健吉先生お世話になりました

大野 良一

山本健吉先生に心から哀悼の意を表します。

私は先生と出会って十年も経ってはいませんが、大変お世話になりました。それは奇しくも二つの異なった場面で出会いました。一つは先生が寺田寅彦記念館友の会会長として、寺田寅彦銅像制作の依頼をしてくださった時です。その制作の折には、先生には周到な計画と配慮と、陰に回って並々ならぬお骨折りを頂きました。像計画の当初から、宮先生、田口先生とともに、遠方の私のアトリエに何度も足を運んでくださり、像はどのような姿にするか、設置場所はどこにするか、題字はどのような言葉にするのかなど相談をし、助言をいただきました。こうして銅像を完成することができました。いま追手筋の景観に溶け込んだ寅彦像を見るたびに、皆で造り上げた時の気持ちが甦ってきます。

もう一つは、先生が杉の子第2幼稚園の園長として、私のオーストラリアに住む娘と孫がお世話になりました。高知に休暇で帰省する孫たちを、たびたび幼稚園に短期入園をさせていただきました。その折には、園長直々にオーストラリアに何度もメールをくださり、娘はとても親切な先生に恐縮し感動しておりました。この園長と、寺田寅彦記念館友の会会長が後に同じ人であることに気が付き驚いたことでした。

思いやりの人、世話を厭わない人、頼りになる大きな人でした。いま追悼文を書きながら、あの独特の早口と笑顔が思い出されます。大変お世話になりました。どうぞ安らかにおやすみください。  
(彫刻家)

## 山本健吉さんのこと

関 直彦

山本健吉さんとお目にかかったのは、ただ一度だけ。祖父寅彦の銅像の除幕式と、それに続く友の会の会場でご挨拶した際でした。私は東京在住の身で、遠く離れているためですが、それ以前に山本さんとは電子メールを通して何度かやり取りがありました。

最初に寅彦の銅像建立の相談を山本会長からもちかけられた時、私はある理由から反対意見を述べました。私が生まれたのは祖父が他界してから4年後だったため、祖父とは面識はないものの、母から常日頃聞いた話もあり、目立つことは嫌いな人であると察していたからです。実際、写真に撮られることも嫌いで、そのため、有名な割に残っている写真が極めて少ない結果となります。高い台座から偉そうに人々を睥睨するような銅像ができたら、天にいる祖父から大変にお叱りを食らうだろう、と恐れたためでした。そのため、銅像を作るなら胸像ぐらいに止めておいては、と進言したのです。

私の意見は取り入れられませんでした。しかし、出来上がった立像を見て安堵しました。その大野良一氏の手による作品は、椿の花を片手にした温厚そうな、探求心に富んだ

寅彦を彷彿させ、これなら叱られることはないだろう、と感じた次第です。森羅万象をひょうひょうと見物する姿。これで良かったのだ、というのが私の感想と反省でした。山本会長、大変失礼しました。そしてご決断を誠に有難うございました。また今回、友の会の活性化にいかに関与し、『榭』の発行にいかに関与を注がれてきたかを知り、山本会長が亡くなられたのは残念至極なことと思います。

また寅彦一族の墓碑を丁寧に清掃していただくなど、孫たち子孫はいずれも遠方に住んでいたり、高齢のために、ままならずで、衷心より感謝しております。寅彦の没後 85 年を経ても、寅彦記念館友の会は活発に活動を続けていることの功績は、山本会長のお蔭と思われ、ご冥福を祈るとともに、今後は新任会長の宮さんのご活躍に期待しております。

最近、伊集院静の小説『ミチクサ先生』や、芥川賞をとった石沢麻依の『貝に続く場所にて』に寺田寅彦が登場するなど、思い掛けないところで寅彦が復活し、引っ張りだされるのは大変興味のあるところですね。寅彦関連の書籍が未だに続々と発刊され、世間の評価が依然として落ちていないのも、山本会長の活躍が少なからず貢献しているものと思われ  
(関弥生の次男、寅彦の孫)

## 高知と加賀の交流～山本健吉さんを偲んで～

神田 健三

中谷宇吉郎の生誕 120 年だった 2020 年は、コロナウイルスの感染が広がり人々が集まる催しはしにくい状況だったが、10 月 10 日、オンラインで、120 回目の誕生を祝う国内外の人達を結ぶイベントが行われました。このとき、高知の寺田寅彦記念館で収録された山本健吉さんと伊東喜代子さんのビデオレターが紹介されました。お二人は交互に、寅彦と宇吉郎を語り、高知の記念館と加賀の雪の科学館の交流の歩みについて語られました。



ビデオレターで語る山本さん

山本さんは、寅彦の銅像の建設が実現したことを報告し、8 年後の 2028 年が寅彦の生誕 150 年なので、その際も交流させていただきたいと述べられました。【雪の科学館の HP で〈ユーチューブ〉をクリックし、「ナカヤ君 120 回目の誕生日おめでとう」を開けば視聴できます】

力強く 8 年後を語られた山本さんでしたが、その 1 年後にご逝去されたとの残念な知らせを受けました。友の会会長として、寅彦の偉業の継承と、記念館、友の会のために奮闘

してこられた山本さんのご冥福をお祈り致します。

私が山本さんに初めてお会いしたのは、2012年9月26日、高知のある料理店でした。2012年は宇吉郎の没後50年にあたり、雪の科学館が特別展「中谷宇吉郎と寺田寅彦」を開くことになって資料借用のため高知県立文学館に出張した、その日の夕方でした。料理店に集まった数名の友の会役員を前に、前会長の恒石直和さんから、新しい会長になられた山本さんが紹介されたのです。その時の山本さんは明るく爽やかな感じで、好感が持てました。そして、特別展が始まった11月23日、山本さんは高知からお一人で雪の科学館に来訪されたのです。熱心に展示をご覧になり、友の会会長口野哲夫さんとも親しく交流されました。【『榭』66号参照】

2015年の寅彦没後80周年では、「親愛なる寺田先生～師・寺田寅彦と中谷宇吉郎展～」が文学館で開催され、講演や実験紹介などのために私が招かれたので、その機に友の会の人達とも親しく交流し、寅彦のお墓参りにも参加しました。寅彦の銅像建設に向けて、1,000万円の募金目標はもうすぐ達成するとのことでした。山本会長は、いろいろ課題があるがどれも手を抜かずにやらないといかん、と強い責任感で明るく語られたのが記憶に残っています。【『榭』75号】

高知と加賀、地理的には遠いけれど、寅彦と宇吉郎の友の会は、二人のよき師弟関係を背景に、大変親しい交流の歩みがあり、それが今後も続くことを願い、山本さんが提案された2028年も展望していきたいと思います。

(中谷宇吉郎雪の科学館顧問、同友の会顧問)

## 会長・山本健吉氏と交流会「寺田寅彦 in 高知」の経緯

菅佐原 智治

夏目漱石の半世紀振りとなる記念年も過ぎた平成30年の春、この年が寺田寅彦や松根東洋城の生誕140年に当たることから、寺田寅彦記念館友の会会長山本健吉氏に電話で相談したのが始まりだった。漱石と寅彦、東洋城は元をただせば先生と生徒の間柄だった。しかし師弟を越えた親密な関係に迄発展したのは周知の事実である。そこで、故人を見做つて、夫々を顕彰する会や偲ぶ会同志の交流があつたとしても不思議ではないよな一との思ひは以前から個人的に抱ひてゐた。

「山本会長、寺田寅彦記念館友の会と各地の漱石を顕彰する会、一般財団法人子規庵保存会、新宿区に新しく出来た漱石山房記念館の面々、夫と松根東洋城の姪御の松根敦子さん等で高知に参りますから、二人の生誕140年を記念する交流会を致しませんか」と電話で提案した。此の問い掛けに「夫は意義深いことですねー。日程とか具体的なことはこれ

から決めるとして、是非一緒に遣りませう」と好意的な答へが返つて来た。ややもすれば「総会に諮った上で返事を」など、杓子定規で消極的対応になるところ、山本会長は違った。穏やかな話し振りの中にも、確かな判断力と責任感の強さが、電話口から伝はるのであった。

そこで、具体的なことを決めるため、全年4月、寺田寅彦記念館に山本会長を訪ねることになった。まづは開催日をどうするか、矢張り、高知県立文学館で「寅彦先生に学ぶ天災展」開催期間中のほうがいだらうと云ふことで10月24日～26日が候補に上り、交流会の名称は「寺田寅彦 in 高知」と決まったのである。開催迄の間には予期せぬことも起こった。夫は広島で「漱石とお茶」を実践してゐる茶道家・花井隆爾氏は、寺田寅彦記念館にも立派なお茶室があるのを見て、高知の皆さんに石臼で挽き立ての抹茶を味はつて貰ふのはどうだらうかと「漱石とお茶」ではなく「寅彦とお茶」を提案してくれた。しかし開催三ヶ月前の7月、花井氏の急逝により断念せざるを得ず、その高尚な催しは幻に終わった。

いよいよ「寺田寅彦 in 高知」を迎へるのである。首都圏からの参加者は三十八人、熊本は三人、二日目からは愛媛新聞社の岡敦司記者氏も加はつて総勢四十二名が集結した。初日は『土佐日記』の跡を訪ねるがテーマで、南国市の「国府史跡保存会」会長・岩川直美氏、観光協会事務局・野中京子氏のお二人にお世話になった。二日目はメインテーマの「寺田寅彦、松根東洋城生誕140年」である。午前中は寅彦所縁の跡を貸切りバスで廻った。中でも最初に訪ねた「江ノ口小学校」の顕彰碑前では、田村和枝教頭先生から、入学した児童がこの顕彰碑をお墓と間違へて手を合はせるとか、五年、六年になつたら寅彦に就いて学ぶと聞かされた一同は感心しきりだつた。建立したばかりの寅彦像を見た後、午後は高知県立文学館で開催中の「寅彦先生に学ぶ天災展」の鑑賞並びに講堂に於て川島禎子学芸員氏の講演、更に山本会長の挨拶に続いて寺田寅彦友の会幹事・四宮義正氏による講演と、実に内容の濃いプログラムを堪能、夕方からの懇親会に臨んだ。

三日目は寺田寅彦記念館で「正曲一絃琴白鷺会」会長・森本和子氏と長山由里香氏の典雅な演奏に魅せられ、全行事は好天にも恵まれ終了したのである。この最初の交流会を成功裏に導いたのも山本健吉会長のリーダーシップのお蔭である。此処に改めて御礼申し上げ、故人のご冥福を祈らずにはゐられない。

(鎌倉漱石の會代表、(公財)水産無脊椎動物研究所評議員)



高知県立文学館における交流会で挨拶する山本会長(2018年10月25日、筆者撮影)

## 山本健吉会長を偲んで

川島 禎子

高知新聞で山本健吉会長の訃報を拝見しました。しばらくは理解できずに、同姓同名、同じ町にお住まいの別の方なのではないかと思っていました。今も少し信じられない思いがあります。

私は平成 22（2010）年に高知に来ました。高知県立文学館に赴任してすぐに寺田寅彦の担当になりましたので、寺田寅彦記念館友の会とかかわりを持つようになってからすぐに山本会長にお会いしたように記憶しています。

一番多かったのは資料の貸し出しのやり取りでしたが、申請書を郵送ではなくいつも持参してくださいました。間違いがあった時なども、すぐに直してまた持参くださるなど実直な方で、煩雑な作業もいとわず、常に額に汗していたのが印象的です。

当館で開催した寅彦の企画展では、いつもお世話になりました。平成 27（2015）年度に行った「親愛なる寺田先生」展ではチンダル像を見るミニ実験のお手伝いを、平成 30（2018）年度の「寅彦先生に学ぶ天災展」ではおはなしキャラバンで天災に関する紙芝居を上演するとともに、山本さんオリジナルのミニ実験をやっていただきました。さまざまに工夫を凝らされた実験道具に人を引き付ける進行、大変勉強になりました。

最後に来られたのは、寅彦の父・利正の手紙を読んで欲しいということで手紙を持ってこられ、竹本義明先生をご紹介して読んでいただいたときです。メールを確認したら、令和 3（2021）年の 3 月 9 日のことでした。その時も顔色があまり良くないので、少し心配していましたが、まさかこんなに早くお別れの日が来るとは……。

ご冥福をお祈りいたします。

（高知県立文学館主任学芸員）

## 公演への道

西森 良子

寺田寅彦の生涯を演劇にしたい。この高知の地に発信したい。2016 年 12 月その思いは実現され、私達劇団 the・創は「寺田寅彦物語」を上演した。台本をつくるに当たっての忘れられない思い出を書き留めておきたい。

熊本に取材に行く途中、熊本地震に遭遇し、引き返すはめになり、何か月もの後、再び向かった。五高の門をくぐり、黒髪町の立田山に登り、眼下に広がる町並みを眺めると、熊本城が哀れにも崩れ落ちていた。寅彦がバイオリンを弾いていたかも知れない山中に立った。柏木邸の前で奥様にバッタリ会い、訪ねてきた理由を話すと、急いで家の中に入られ、当主の柏木先生が玄関に現れた。又、寅彦が足しげく通った漱石の住んでいたという借家は地震のためロープが張られて入れなかった。路地から路地を歩きながら寅彦の世界に一步踏み込んだ気がした。

東京の街はただただ広い——根津界限。小石川植物園。寅彦の通っていたという番町小



学校は健在していた。東大の赤門をくぐり本郷の弥生町あたりをつぶさに歩いた。坂道を登ったり、下ったりしている時、古い家で木に覆われた黒塀の陰気な家があった。弥生町付近だった。同行している夫に「ここやなあ、弥生町の家？」と声をかけると「うーん、そんな気もするね」。しばらくその家の前から立ち去りがたく二人で佇んでいた。坂道を買った物かごを持った寛子が歩いてくる姿が陽炎の中に見える気がした。

種崎、須崎での取材は切ないものだった。夏子が住んでいたという家は今はあとかたもない。でも海岸の堤防に立ち寅彦の乗っていた船に向かって手をふったであろう沖は青い波のままである。病む胸をおさえ風の音、波の音を聞いた夏子の心を思うと切ない。「命がけで産んだ子に乳も飲ませず別れさせられ惨いことですのう」亀のセリフに思いを込めた。夏子の亡骸は浦戸湾を入り寺田邸に運ばれた。見送る提灯のかすかな灯がそれを見送った。ラストシーンは三人目の妻紳が住み慣れた家を去る日に寅彦の愛弟子が訪れ、寅彦と共に生きた人達の代弁者として「寺田寅彦の生きた証はずっとこれからも共にあるのだ。」と表現した。

劇づくりの中で大きな原動力となったのは、科学は愛——科学によって人間を不幸にしてはならないという信念、がんじがらめの権威主義を嫌い、科学者としての誇りを大事にして生きたという生き方への共感といえる。

この演劇の上演のため力を貸してくださいと会いに行った時、山本健吉会長の弾んだ声！「え！演劇に！これは何とうれしい。」満面の笑顔で受け止めてくれたことが忘れられない。公演成功のため力になってくれた方々にこの場をお借りして御礼を言います。私達は演劇という舞台で寅彦と共に生きた——この大きなかけがえのない宝物を大事にしていきたい。友の会の発展を祈ります。（文中の敬称略）（劇団 the・創 代表）

## 追悼：山本健吉会長

宮崎 嗣生

山本会長が昨年9月3日にご逝去されました。悲しみと同時に、やり切れない気持ちが日に日に募ってまいります。亡くなるのには早すぎるということだけでありません。彼がさらにこれからというところで突然いなくなってしまったからです。

8月23日の電話が最後になりました。「皆さんに大変ご迷惑をかけてすみません」この言葉を頻繁に聞く会話となりました。心身ともに大変な状態でありながら、なお、この言葉です。極めて厳しい病状にあったことを後で知り、そのときの彼の心情を推しはかると辛くそして切なくてたまらなくなります。もう話すことのできない、その現実を受け止めると一層淋しさが増してまいります。今、改めて彼との思い出や記憶が頭の中を駆け巡るように甦ってまいります。彼と初めて会ったのは今から約60年前、1学年下の彼が同じ高等学校に入学して来た時でした。その後、彼は大学卒業と同時に学校に勤務し、最後は学校長として退職し、退職後は幼稚園の園長として、人生の大半を一貫して人間を教え育て

るという合理性とか効率性を中心とする組織とやや異なる環境の下で送りました。学校経営では、学校長の権威が単に法制上の権限によるものでなく、教員の自発的で積極的な受容によることがどれほど大切であるかを問題や課題の解決の過程で実感し身に付けてきたことだと思えます。こうして形成された人間的魅力と実践力を基盤とする人格的権威は、どの世界でもリーダーとしての要件の一つだと考えます。

このような経歴の彼に平成 23 年度から会長をお願いし事務局長も兼任していただくことになりました。在任期間 10 年余り、その功績は『榊』92 号「追悼 山本健吉会長のご逝去を悼む」で余すところなく記載されています。編集部の温かく心のこもった追悼文を読み返すたびに彼の笑顔が目に見えられます。

ここでは私からは功績とは別の視点、会長をお願いした経緯について述べさせていただきます。お願いする数年前から、会の運営に関して共通理解と合意形成が十分でなかったため、会員間での軋轢が度々生じ、会の雰囲気は友の会の名称から想定される和やかなものとは程遠いものでした。そのことは議決機関としての総会の在り方、執行機関としての幹事会を構成する役員一人ひとりの当事者意識が問われ、今一度、本会設立の基本に立ち返らなければならないと多くの方が思ったのではないのでしょうか。私は複数年、総会の議長を務めましたのでその時の会の雰囲気、議題、協議内容等は比較的鮮明に記憶しています。平成 22 年度には会長が総会終了直後に辞任するという事まで起こりました。ご本人もさぞ複雑なお気持ちであったらと思います。結局その年度は事務局長に会長職を代行していただきました。

そんな状況の中で、本会の新たな出発のために会長をお願いし重い荷物を背負っていただいた人物が山本会長です。会の存続が懸念される危機的な状況の中、複数の役員から会長としての適任者について相談を持ち掛けられました。私の頭には即座に彼こそがこの難局を打開してくれる人物だと思いました。他の方は全く頭に浮かびませんでしたし考もありませんでした。断られる場合を想定し第 2、第 3 の候補者を思うこと自体、彼にも想定した方にも大変失礼なことであり敬意を欠くことです。お願いしたからには必ず引き受けていただく、そのためどんな努力も惜しまない覚悟でした。会長としての資質、能力はもちろんのこと、同時に、極めて大切なことは第三者的な立場で会を眺め、考え、判断し、舵取りができることでした。幸い彼は会員間の軋轢から距離があり、その渦の外にいたことで、どの考えにも組みしていないことを多くの役員が認識くださるのではないかと率直に話しお願いしたところ、気持ち良く引き受けてくださいました。

爾来 10 年余り、会員とともに汗を流し、新たな事業を起こし、多くの業績を残したことは彼が好意的に迎えられ信頼されていた証だと考えます。

彼のイメージは駆け引き、手練手管、自慢話等の言葉とは縁遠く、ことに当たる場合はそのことと正対し損得を考えない非常に謙虚に本質に迫る人でした。心の美しい人でした。そんな心を何時までも持ち続ける人はそんなに多くはないのではないのでしょうか。改めてその思いを強くいたします。また一人、心の美しい人と別れなくてはならなくなりました。

た。悲しいことです。

山本君、大変お世話になりました。どうぞ安らかに眠りください。心からご冥福をお祈りいたします。  
(本会副会長代行)

## 故山本健吉会長を偲んで

楠田 純一

「えっ!?!」「あの山本会長がですか!?!」

訃報をはじめて聞いたときは、にわかには信じられなかった。新聞記事を見せていただいていたはじめて認めるしかなかった。でもやっぱり未だに信じられない。

今度また寺田寅彦記念館を訪れたとき、いつものあのやさしい笑顔と明るい声で「やあ、遠いところようこそ、さあうえへ…」と声をかけてもらえそう気がするのである。

私は 2012 年 8 月にはじめて寺田寅彦記念館を訪れて以来、今日までに 11 回訪問させていただいた。春の総会・講演会と秋の研修会が主目的で訪問させてもらってきた。これを私は勝手に「土佐の寅彦」詣とよんでいた。

「土佐の寅彦」詣では、寺田寅彦記念館を起点に、毎回、高知県立文学館(「寺田寅彦記念室」)、寅彦の墓所、高知地方气象台遠隔露場、そして今では寺田寅彦銅像を加えて巡っていた。

10 回目訪問(2019 年春の総会)の前に、山本会長よりとんでもない依頼を受けた。「総会の前に記念講演をしてくれないか?」ということだった。

「友の会」のみなさんの前で、「寅彦にわかファン」にすぎない私が講演するなんてとんでもない話だ、と判断した私は最初はお断りしていた。

しかし、山本会長の「自分の好きなようにしゃべったらいいんですよ」のやさしい言葉に甘えて、恥を承知のうえで挑戦させてもらうことにした。

『オンライン「寅の日」の取り組みを通して～今、なぜ寺田寅彦なのか!?!～』のテーマで話をさせてもらった。準備の段階から何度も何度もていねいに連絡をくださって助けてもらった。また終わった後も『榊』の原稿にするからと、テープ起こしをして、まとまらない話を何度も訂正しながらうまく文章にしてくださった。

ありがたいかぎりだった。今ではとても貴重な経験をさせてもらったとたいへん感謝しています。これも山本会長のあたたかい言葉があったおかげです。

山本会長にあたたかい言葉をかけていた



除幕直後の銅像と子供たち  
(2018 年 7 月 24 日、筆者撮影)

だいたのはそれだけでなかった。大野良一先生のアトリエ訪問のときも、「寺田寅彦の銅像」除幕式のときも、等々思い出せばきりがありません。

これから寺田寅彦銅像の前に立つときは、きっと山本会長のあの笑顔と、かけていただいたあたたかい言葉を思い出すことでしょう。ほんとうにありがとうございました。

(本会会員、サイエンスコミュニケーター)

## 「思い出」

田口 保雄

寺田寅彦記念館友の会が銅像制作の依頼をした彫刻家大野良一先生のアトリエは池川中学校の前にありました。

記録を辿ると池川へのドライブで山本会長と一緒したのは2013年4月29日、10月15日、2014年1月28日、そして鑄造が完成した2017年12月6日の4回ありました。

私がHPで使う銅像制作経過の写真撮影のために最初に訪問したときは、山本会長、銅像建立発案者の宮副会長と各自の車で、大野先生の車に案内されて行きました。このときはまだ構想の段階で、立ち姿や椿の花のアイデアから始まり寺田寅彦の写真や絵や随筆などの情報提供などをする場に立ち合わせていただきました。

年が明けてからは、私が半身マヒを患ってしまったため初めて山本会長の運転する車に宮副会長と共に私も同乗させていただきましたが、丁寧な落ち着いた運転で安心して景色や会話を楽しむことができました。

山本会長はアトリエで大野先生と刻々の粘土の試作を見ながら寅彦の人間像や現存される親戚の思いなどを話し意見交換していました。数回の訪問で山本会長と大野先生ご夫妻とのやりとりは誰とも分け隔てのないいつもの彼らしい熱心な対応が見えました。

山本会長と宮副会長は高知市内校で長く、お互い気心がわかり合えるようで、会長と副会長としてとてもいいコンビのように感じ、私はこの体制は長く続くことができると思っていました。ほとんどお手伝いはできませんでしたが、会の運営も順調に軌道に乗ったように見えていました。そんなときに会長がこんなに早く、しかもご逝去という形で副会長とコンビ解消になるとは全く思っていなくて残念なことでした。

山本会長、お疲れ様でした。

(本会幹事、HP担当)



秋季研究会で挨拶する山本会長  
(2012年11月17日、筆者撮影)

## 山本健吉さん、ありがとうございました

四宮 義正

山本さんのお名前を初めてお聞きしたのは、もう 10 年以上も前で友の会が存続の危機に瀕していた時である。私は高知県外だから活発な教育活動については存じ上げなかった。

猛烈な活動ぶりは会長に就かれてから知ることになる。総会や例会に出席し、『榭』に投稿を重ねるうちに校正依頼がくるようになり、いつの頃からか巻頭随筆、ページ調整を兼ねた情報あれこれなど、少しばかりお手伝いするようになった。

川村源七著『寺田寅彦と土佐』の復刊や伊東喜代子さんが『勾玉』に連載したエッセイの書籍化を提案すると、すぐに動いてくれた。後者はコスト低減のため、ご自分で何もかも作業して『寺田寅彦先生と私～二十数年寺田寅彦記念館に勤務して～』に結実した。

野並亀治宛て絵はがきが発見されて『榭』に解説文を書き、柏木潤さんのご講演で五高入学願書が紹介されたので、これも翻刻と説明文を掲載することになったのも山本さんのご配慮であった。随分と我儘も言わせてもらったが、信頼していただいていたようにも思う。原孝徳宛て書簡や明治 39 年 7 月の寺田寅彦集合写真について情報を伝えると直ぐに動いてくれる、とても頼りになる存在だった。私の PC が古くて DVD が見えないと伝えると、テレビ画面をカメラで録画してくれたこともあった。2020 年 12 月には、お一人で須崎と大野見に寅彦ゆかりの地を訪ね、写真で現状を知らせてくれもした。

楽しかったのは例会のあとの高知会館での懇親夕食会だった。10 人～15 人程度の参加が多かったが、時には講師の方も参加していただいた。自分の飲食費用を支払うとう合理的な会計で、気楽に情報交換ができたものである。

山本さんらしい気配りを感じたのは、よく知られている寅彦家族の墓ではなく、寺田家祖先の墓所の掃除である。研究会の後に有志で出かけた。加賀野井団地の隅に車を止めて階段を登ったところにある。幹事の田口保雄さんが切り開いてくれていたのであるが、しばらくすると笹が茂り、樹木が大きくなって墓石が隠れていた。植物を取り除いて整備し、記念撮影した。しかし、草木の勢いは衰えるものではないし、嵐が来ると大木も倒れる。その後も、お一人で笹の刈り取りなどされていたのは本当に頭が下がることである。

講演を 2 回やらせていただいたのも思い出である。最初は 2014 年 4 月 13 日、『夏目漱石と寺田寅彦～熊本時代を中心にして～』だった。毛筆の演題垂れ幕を用意していただいたのに感激した。少しでも話しやすいように気配りしてくれたのが嬉しかった。

2 回目は 2018 年 10 月 25 日だった。鎌倉漱石の會、子規庵保存会などの皆様が来高された時、高知県立文学館のホールで、『寺田寅彦と高知』と題して講演させていただいた。

ここでは 2000 年 6 月に杉本苑子さんの講演を聴いたことがあり、いつか自分もと夢のように思っていたので、一入の感激だった。大勢が参加した高知会館での交流懇親会での会長挨拶は、いつもに増しての早口で、内容が伝わったのだろうか心配したものだった。

(本会幹事)